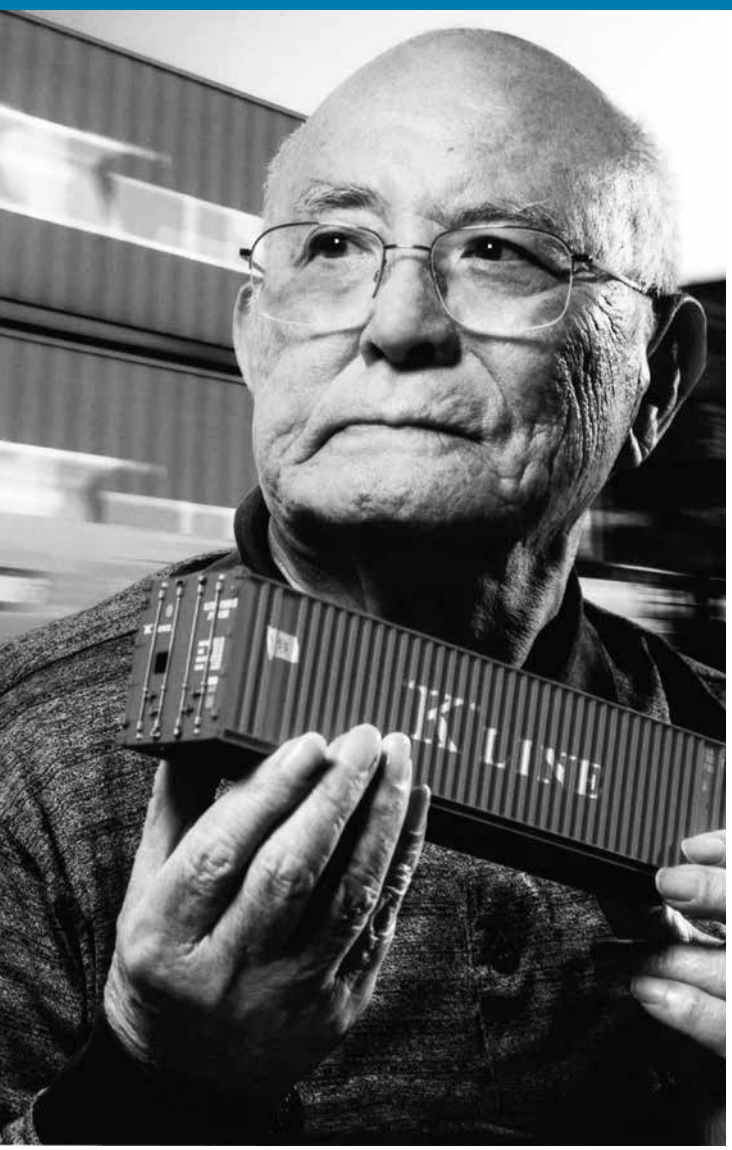
全米最大のコンテナ港を築いた男

―浅見紳太さん―



毛呂山町西戸で生まれ育ち、邦船大手川崎汽船のロングビーチターミナルであるインターナショナル　トランスポーテーション　サービス（以下　ＩＴＳ）の社長および会長を長年務め、当地で「海運、港湾の宝」「海運コンテナ史の生き証人」とも言われた浅見紳太さんが今年の1月31日に永眠された。

毛呂山町から羽ばたき、ニューヨーク海務監督、アラスカ航路開設、タコマ港開設、そして全米初のオンドックレール（※）開設といった大きな功績を残した偉大なる国際人の足跡をたどる。

※オンドックレールとは港で船から下ろされたコンテナをターミナルで直接貨車に積み、輸送するコンテナ専用列車。その長さは２０００メートルにも及ぶ。

勉強よりも魚釣り

浅見氏は大正14年1月、川角村西戸に生まれ、越辺川で魚釣りに熱中した少年時代を過ごした。

当時の越辺川はとても澄んでいて、ハヤやフナが面白いように釣れたという。捕った魚は持ち帰って食べていたが、村のおじさんたちに「そんなに捕ったら川に魚がいなくなっちゃうじゃないか」と文句を言われるほどだった。

当時、父親は東雲高等小学校の校長をしていたが、自分の子どもに教えると担任がやりづらいだろうと学校で必要なことを何も教えてくれず、小学校に入学してからも字が読めず、歌も歌えず大変な苦労をしたという。

しかしながら、先生の話を聞いて一生懸命に勉強をし、県立川越中学校（現県立川越高等学校）に進学。毎日、片道1時間半をかけて自転車通学し、ときにはこっそりトラックの荷台につかまり、危険ではあるが楽をした懐かしい思い出とのことである。

戦時下の商船学校へ

川越中学校卒業後、全寮制の東京商船学校に進学する。当時は商船学校とはいえ、戦時下であったため、海軍の組織の一つのようになっており、二、三期前の学生は出征し、大勢が戦死していた。クラスの全員が海軍に招集されたケースもあったという。

昭和20年3月の東京大空襲の際には、何千人、何万人の被災者が商船学校に避難してきたため、学生も救助活動にあたり戦争の悲惨さを体験することとなった。

キャプテン・アサミ

戦後、川崎汽船に入社し、終戦時にソ連やアジア全域に残された兵隊と在留邦人の家族を引き揚げさせるため、四等航海士として復員業務につく。薬や食糧、水といった物資が不足するなかで船上で亡くなる人もおり、「これから自分は、この国はどうなるのか」という無力感があったという。

その後、貨物船に乗船して国内、海外航路を巡り、初めてアメリカに着き、驚いたことはとにかく何でもスケールが大きいこと。「こんな大きい国となぜ戦争なんかしたのか、勝てるわけがないのに…」と心から思ったという。

井上町長　私が23歳のときアメリカに視察に行くことになり、そのとき父が「向こうには私が子どものころによく遊んだ浅見紳太という人がいるから、会って私がよろしく言っていると話してくれ」と言われ、当時、カリフォルニアで埼玉県人会の会長を務めていた紳太さんに会うことができました。

石澤彰文さん　父は日本に帰ってきてからも想いは埼玉であり、毛呂山でありましたね。川越中学卒業後、商船学校に進学しましたが、どうして商船学校かというと毛呂山、西戸にいると海に憧れがあったようです。

井上町長　私が生まれるときに取り上げていただいたお産婆（助産師）さんは、紳太さんのお母さん（継母）なんです。

石澤圭子さん　西戸あたりの子どもはみんな取り上げたというのがおばあちゃんの自慢でした。

井上健次町長

浅見紳太さんの長女である石澤圭子さんと夫の石澤彰文さん（臨済宗建長寺派宗務総長）

父は毎年、川越高校卒業生の会には休むことなく参加して、その際には毛呂山の実家のお墓参りも欠かさずにしていました。父は、アプタン先生（エリザベス・F・アプタン　毛呂山町初の名誉町民）のところで英語を覚えて、スペイン語まで勉強したんですよ。

井上町長　そうした巡り合わせがあって、紳太さんが海外で活躍できたと思うと、すごい結びつきですね。

石澤彰文さん　父の人間的なことを思うと、表裏のない人で真面目で実行力のある人でした。そういう人だから、国の東西を隔てても色々な人から信頼されて偉業をなしとげられたのでしょうね。

1960年、厳しい気象のアラスカと日本との海上航路開設を成功させ、35歳で船長となり、多くの人から「キャプテン・アサミ」と呼ばれるようになった。

強い信念を持って・・・

1963年、ニューヨークで海務監督をしていたときに招かれた「コンテナ披露パーティ」において、これからはコンテナが海運の主流になると確信する。

コンテナ輸送の利点を会社に理解してもらうのに大変な苦労をし、また既得権益団体や市議会の猛烈な反対にあい四面楚歌の状況になる。しかしながら信念を貫き通し、ロングビーチ港にコンテナターミナルを開設し、ITSを設立し、二代目の社長に就任する。

ITS設立後は顧客を獲得するために、アメリカ、ヨーロッパの船会社を妻の敏子さんと共に奔走し、5年後には全米最大の港運会社に成長するまでとなった。

オンドックレールの開設前は、大量のトラック輸送により排出される排気ガスが社会問題となっていたが、オンドックレールにより港周辺の混雑の緩和と大気汚染を抑制できたロングビーチ港は、全米一のコンテナ取扱い港として発展することとなった。

オンドックの父

1995年、ロングビーチ市議会より表彰を受け、ロングビーチ港湾局や連邦政府より「ファーザーオブオンドック（オンドックの父）」の称号が授与された。

定年退職後、住み慣れたアメリカで生活を続けていたが、病気により医療的ケアが必要となったため、帰国。横浜市にある長女の自宅近くで、自身が手がけた本牧ふ頭のドックが見える高齢者施設に入所し、妻と共にゆったりとした生活を楽しんでいたが、1月末に肺炎を起こし94歳で永眠された。

（参考文献…「人生・夢航路」浅見紳太著）

毛呂山町で生まれ育ち、様ざまな結びつきを経てアメリカに飛び立った浅見紳太さん。困難に立ち向かっても、自分の信念を貫き通し、その地域の環境を改善し、地域の発展の原動力となったことに、大いに勇気づけられ、誇りに感じられるものである。